

同窓會々報

◆庶務部

幹事 福田勝義

延山の名木枝垂櫻が綠葉の感觸も柔かに道行く沙彌の圓頂をサラ／＼と摩し木々の生氣溢るゝ新綠の強き香りに接した時彼の若き求道者は何を感じてか突如歩を止めて暫時冥目せり彼れの想中果して何か：兎もすれば生氣なき因襲的怠眠に捕はれ世上慨宗の士をして「末期的宗門の悲惨な姿」適處適材の組織に缺けるが如き因襲的情事的宗教体系の所産は現下宗門の全面的不振」等々悲奮せしむるは此れ誰が罪ぞ、立正安國の深き信念に發して此の山に道を求め既に幾星霜、當初一番棲神止魂、我等が大聖の尊像を拜し感激落涙自ら誓ひし願業も末法濁世の惡風潮に障されて既に忘却せる今、大聖に關係最も深き櫻の青葉が木々の綠の生々とした更新の姿が、彼れの怠眠を打ち破り忘却を甦らせて再び勇猛精進願業の遂行に奮起せしめようとする、茲に於てか彼の沙彌は再び歩を祖堂に運び氣色満面心境を新に尊像の御前に端座合掌冥目暫時眼を潤せり、此れ初夏五月の候であつた、同窓會亦外非常時在り、内に宗門的缺氣の憂有りと内外の情勢交々來りて吾人の眠心を撃くの時昭和九年度部長及び幹事として左記十三名が執務する事に決定を見たのは五月一日に

同窓會記

して此の日から學生二百の意氣と信念の發揚をリーダーすべく非常時内閣てふ意味の人員組織でスタートしたのである。

會長 院長 望月日謙殿下

副會長 教頭 遠藤是妙先生

庶務部長 鹽田義遜先生 會計部長 中條是明先生

辯論部長 松木本興先生 文學部長 今村是龍先生

購買部長 望月德英先生 運動部長 若月堯惇先生

庶務部幹事 福田勝義君 會計部幹事 後 松本龍宣君

辯論部幹事 葛原榮靜君 購買部幹事 幡野存靜君

運動部幹事 小松文妙君 後 任 古屋是聞君

購買部助手 成田正學君 文學部幹事 櫻榮鍊靜君

前年度棲神發行後の重要事項を記す

昭和八年十二月二十八日 望月恒匡先生は生等の最も尊信せる篤學溫厚の青年佛教學徒にして其の專攻せられしは印度哲學にして生等は幸にも其の講義を受けて根本佛教に於て啓發せられし所多大なりしも、御師範の宗務總監就任と同時に先生は其の秘書として宗務院に轉任宗教を執らるゝ事となりしは學院教育上には一大損失なるも又再考して宗教上に人格篤實の先生が參加せられた事は將來の宗門の爲に欣快とする處であり此の意味に於て先生は榮轉せられたのである、本會にては中澤前庶務幹事初め學生多數見送りを爲す。

一月三十日 中澤前庶務幹事上京し望月恒匡先生に謝恩記念品を贈呈す。同日現行校友マークの注文を爲す。

二月十六日 聖誕七百十三年を記念する學院創立記念日をトして雄辯大會と次で茶話會とを開催し大聖の昔日を偲び奉り未來死身弘法の助縁と爲す。

三月十六日 昭和九年度第二十三回高等部中等部卒業生送別の茶話會を開く、例年の事乍ら在校生と卒業生が交はす別離の言葉では泣かれるものだ、毎年巢立ち行く先輩は残れる吾等に自己の失敗や得意を語つて良き教訓として残して行く！。其後記念撮影を行ふ。因に卒業生左記の如し。

◇高等部卒業生十七名

半澤經一君 落井良昭君 金川龍洗君 依田湛淳君

田島智解君 谷川寛徳君 内川海儀君 山田義順君

山本隆也君 福士泰量君 古田正義君 藤山英雅君

青柳正光君 酒井將教君 最上英俊君 岩田幾親君

松野義應君 (順序不同)

◇中等部卒業生 名

橋爪智要君 林 惠龍君 小澤玄誠君 田中義清君

田島仙易君 永瀧曉順君 井手壽導君 葛原榮靜君

松木龍宜君

同日 聖誕記念書道展を釋迦堂に開催、本學出身にして母校に書道を教授される加藤鍊明(雲洞)先生の審査の結果左の成績を得。

一等 中二 岩崎龍雄君 二等 横澤英海君
三等 中四 太田 豊君 四等 中四 河村一郎君

五等 中一 田村啓孝君

四月二十八日 此日建宗の聖辰を幸に例年の通り今年度新入生諸君五十余名の歡迎茶話會を大客殿に開催して共に學び俱に行ぜんと誓ふ。祖廟中心の聲と共に逐年學生は全國的に參集して増加し行く事は宗門興學上慶賀すべき傾向である。

五月一日 學窓に映ゆる校庭の新緑の反射を浴びて第二十三回同窓會定期大會は開會せられた、議長中條是明先生、副議長望月徳英先生決定の下に例年のプロ通り前年度幹事の各部經過報告より始まり質疑事項に入り議論沸然として起り正に尖鋭化さんとす次で新舊幹事の辭就任の挨拶が二百健兒の拍手裡に終り新年度の豫算報告あり満場一致通過希望案の討議に入りしも時既に午後五時となり遂に討議打ち切りとなし第一日を終り三日に會期延長さる、再會には購買部と會計部とに監査員を設ける建議案が提出され可決され其選出法の如きも數々協議の結果次の如き條文となる

購買部及會計部ノ監査員ハ

高等部二、三年級ニテ高等部二年級ヨリ五名ヲ選舉シ副會長及當該部長之ヲ任命シ、庶務幹事ハ之ヲ兼任ス

右に依り選出された今年度監査員は

今井是觀君 青木孝勝君 渡邊信覺君 野出學惠君
高尾龍教君 福田勝義君(兼任)

尙購買部助手は次年度には必然的に同部正幹事の資格を得る事に議定さる、斯くて緊急動議に入り種々議する處あり午後二時

頃盛會裡に閉會す。

五月二十日 午前九時より春季庭球大會開催盛大なり詳細運動部報。

六月二日 午前五時三十分佐渡修學旅行の一行七十二名出發す

六月六日 午後十時四泊五日の行程を終へて旅行隊歸校す、引卒者福島、望月、加藤三教授の御骨折り感謝す。

六月七日 午前十時十八分立正中學五年生三十六名の諸君は石川海淨先生及永尾教監引卒にて身延驛着徒歩には一路本山へ、

同窓會では福田、松木兩幹事高三より濱崎智研君の三人が驛へ出迎へる。本山にて中食後諸堂參拜午後一時半御廟所參拜同所に於て本學教授松木本興師の講演ありて後ち櫻榮成田兩幹事案内にて一行奥之院へ參拜同日午後六時一同奥之院より下山。夕

食後大客殿に於て歡迎茶話會開催何れも感激に充ちたる感想談に終始し、其後席を法喜堂に移して聖傳及身延山の眞寫等の映畫を行ひ一行の勞を慰す。同夜本山一泊。

六月八日 立正中學生一行朝勤參拜の後午前六時伊豆方面へ向て出發本會より福田、松木兩幹事高三中里是要君驛迄見送る。

六月九日 本會運動部幹部小松文妙君休學の爲辭表提出、同君は先の修學旅行には其の調査及準備の爲に多大の勞を拂つて呉れた事を謝す。

六月九日 午後一時より第一學期各級選出雄辯大會開催、特に高松市立正社主幹黒澤松南先生の講演等ありて盛會なりし。

六月十四日 午前八時半小松君出發に就き福田庶務幹事身延驛

迄見送り別離の情を惜む。

同日 次点者古屋是聞君を小松前運動部幹事の後任として推選發表す

六月十五日 今夕より十六、十七の三日間開闢會の道路布敷を行ふ

六月十六日 本會々計部幹事松木龍宣君休學に就き辭表提出。

六月十八日 本日より二十一日迄の四日間本山に於て宗務院主催の第十七回中央布教講習會開催に就き學生の一部は講師の接待、講習員の案内會場の整理等に充り他は聽講せり。

六月二十一日 宗務院教學部より本會へ御菓子料として金拾圓を賜る、基本金へ加ふ。

六月二十二日 本學松木先生より本會基本金とし金拾圓の寄附を賜る、

六月二十九日 本山布教部長柴田韻秀僧正より本會へ御菓子料として金拾圓を賜る 依て基本金に加ふ、

七月十九日 暑中見舞發送

七月二十四日 藤田光肇師遷化、同師は本學出身にして北海道帶廣市法華寺に住職たりしが惜哉本日遷化の赴報に接し謹で弔電を發し遙に哀悼の意を表す、

九月六日 遠藤日秀師本葬同師は支院惠善坊住職にして現本學院教頭遠藤是妙先生の御師範であり又教授今村是龍先生の尊父と承る、本葬の儀式は法主望月日謙現下大導師の下に行はれ、

本會よりは福田、幡野兩幹部參列香資を捧げ。以て哀悼の意を

表す、

九月九日 松本本興先生には七月中旬の第一學期試験の終り頃より眼疾にて次來自坊で療養中と著中休暇明に承り遅延甚だ失禮ではあつたが本日幡野幹事をして御見舞ひせしむ。

九月十日 右に對し本日先生より禮狀を賜ふ。

九月十七日 遠藤延美氏逝去 同氏は本學教頭遠藤是妙先生の御子息にして昨十六日十有七歳前途有爲の身を以て遂に逝去せらる本日福田幹事大宮町大泉寺に於ける葬送の式に參列香資を供へ哀悼の意を表す、嗚呼先生の哀情や如何 冥されよ是觀院日延法師

九月二十六日 東京市江戸川區小岩町宣要寺本學先輩成川文鳳師より本會宛印度佛教史地圖及支那佛教史地圖各一軸の寄贈を賜る依て教授資料として學院に提出し永く存保する事とせり、今後生等後輩の其れに依て佛教史の認識の正確を期し得るは一同師の美舉に據る所大なるを感謝す。

同日 陸軍中將權藤閣下參拜幸に午前八時より大客廳に於て有益なる講演を願ふ、盛會なりき。

九月二十八日 教頭遠藤是妙先生より本會へ御菓子料として金五圓を賜る依て基本金に加入す。

十月十日 本妙庵上棟式、全學生式場に參列す。

十月十一日 本日より十二、三日の三日間宗祖御涅槃の十月大會に際して十二日夜七時から釋迦堂に於て二十名程の學生が主となつて通夜説教を行ふ參聽多數盛會だつた。

十月吉日 秋空高く日本晴の好天氣に惠まれて御大會の勞れも忘れ嬉々として吾等の運動會大會は開催された、詳細運動部報
十月十五日 福田兼任會計幹事は會務整理の爲東京方面へ出張
十七日歸任

十月十八日 長谷川寬善師本葬 同師は大善坊住職にして同所功德會長として其の功顯著なるものありしも惜哉病魔の犯す處となり去る十一日遂に遷化本日本葬の式行はる本會よりは福田幹事參列して香資を捧げ以て哀惜の情を表す、遺子寬亮、寬慶の二君は生等と共に在學中なり誠に其の哀恨の心を察して同情に不堪ず因に寬善院日強聖人と號す。

十月二十六日 身延中學校運動會の招待に接し福田、古屋兩幹事參觀祝意を表す。

十一月二日 第九回聯合雄辯大會を身延町公會堂にて開催（詳細辯論部報）

十一月三日 身延小學校運動會は菊花薫る明治の佳節を選んで花々しく舉行された本會よりは福田、古屋、幡野三幹事出席して祝辭を述べ參觀す。

同日午後一時の電車にて立正大學劍道部員九名の參拜を出迎へに福田、古屋兩幹事身延驛へ。一行は佐藤義選範師を初め本學出身安松師三木師等計七名途中徒歩にて本山へ案内同夜本山へ一泊、翌朝勤後諸堂參拜、午前八時頃本山を辭して東谷より西谷御廟所へ巡拜案内し九時半頃身延中學に於て行ふ學院、中學、峽南劍士との手合に出席の爲山門前出發、（已下運動部報）

十一月四日 身延中學校に於ける峽南野球大會へ學院チーム參加し葛原、幡野兩幹事も出席す。

同日 午後立正大學劍道部員手合せ後身延中學校に於て當日の關係者一同集まりて茶話會を開き本學からは福島、中條先生出席下さつて盛會裡に終り午後三時の電車にて一行出發歸途見送りを爲す、此の催しは將來兩校提携の上に一層の好結果を及すもので能ふ限り毎年行ひたい、茲に佐藤範師重松教師並終始御盡力下さつた三木師に感謝し部長諸君の勞を謝す。

同日 此の日は又小學校に於ては卓球大會も催され學院チームも參加したので幹事としては文字通り多忙な一日だったが全幹事能く努力して呉れて最後迄一の手落なく無事責任の果せた事を感謝す。

十一月十日 本妙庵落成式學生全部參列す。

十一月十一日 好天氣の日曜を幸に秋期庭球大會を行ふ。

△本學出身にして常に母校愛の深き東京深川淨心寺内法苑學院教授荒木經明師には今春法縁の規定に依り「荒木義榮」と改名されたる由

△十月月中本學出身にして小樽市砂留町日正寺栗原旭法師には信徒と共に遠路登山されて清水坊に宿泊、本會の爲に金貳圓を寄贈さる謹で感謝す。

如上本會十一月中旬迄の事業の大略を記録した、行つた事及記録に就ても周到徹密は期し難く不行届や脱漏の点もあらうが大方の寛度にて御諒恕を乞ふ未だ任期中残れる二三の事業あり

同窓會記

吾等は最後の其等に對して全力を集注し完結を全せんと希ふ茲に於て會長副會長並各部長先生の御教導及會員諸士の此迄の援助協賛を感謝し併て今後の御教示と御聲援とを乞ふ十一、二十記、(以上)

◆辯論部

幹事 葛原榮靜

彼の雄辯家の泰斗と言はれるデモステネスも其の初は生來の吃音で加ふるに貧弱なる音聲であつた爲め、その最初の演説は滿場の冷笑と熱罵とを買ふ外なかつた彼は此の爲に屈せず靜かに自己の缺點を省み、之が補足の道を講じ、或る時は鏡面に對して姿正を正し、或る時は怒濤に面して音聲を練り苦心慘憺、ついにマケドニヤの王ヒリツプをして「百萬の大軍恐るゝに足らず、三寸の舌端や眞に恐るべし」と舌神デモステネスの雄辯の前には遂に膝を屈するの止むなきに至つたではないか。

「敵を征服し、城を屠ることも難事であるが大雄辯の力によりて人間の精神を征服し、千年の後世までも其の勢力を有することは人間の事業としては更に大きく亦尊むべきことではあるまいか。」

身には寸鐵の武器を帶びずと雖も三寸の舌よく他を説明して向あまりあるものである。坐せば三尺の地をも覆ひ得ぬ吾々の身体、大自然の暴威の前には何等施すべき力なき吾々の身体、されど三寸不爛の舌端よりほとばしり出づる熱血あふるゝ雄辯の力よく他界を動かすに足るを思へば誰か其の偉大なるに驚嘆

せぬ者があらうか。

雄辯家としての價值は實に一國の文運、民族文化の最高峰に起つもので、一人の大雄辯家の出現は其の業績よく一大學の業績にも匹敵するものであつて、宗教に於ては特に其の偉大性を感ずるものである。

會て時の辯論界を席捲し光輝ある歴史を有せる吾が祖山の健兒よ、兄等の奮起こそ實に刻下の急務である。兄等が胸の底に秘めたる一大經綸を遂行せんは一に偉大なる辯論の力のみ能くする處である。法悦に親む人々は兄等の獅子吼を眞劍に欲求してゐる。

本部が五月以降現在に至る迄の奮闘の跡を略記すれば左の如くである。

五月六日より八日に至る三日間の釋尊降誕會を期して、身延町に於て道路布教を行ふ。當日の辯士は

六日 葛原榮靜君 小崎龍雄君 松木龍宣君 今井是觀君

青木孝勝君 中澤要實君 中里是要君 丸山書記

福田勝義君

七日 福田勝義君 小崎龍雄君 加藤智學君 古川宣悅君

松木辯論部長 今井布教師 久住龍騰君 今井是觀君

八日 松木龍宣君 青木孝勝君 末吉元敬君 丸山書記

松井恒成君 福田勝義君

五月十四日

説教菜、及び説教に行ふ挨拶の次第を謄寫して部員に分與せ

り。

五月十九日

本年度第一回耕辯會を開催す。説教は丙組中二教室、甲組は釋迦堂に於て行ふ。演説は乙組、高三教室に於て舉行す。演説の辯士及び演題左の如し

一、開會の辭 高一 葛原幹事

一、心と力 中四 瀧澤正人君

一、雜言 中四 宇佐美練正君

一、所感 中四 長谷川泰溫君

一、一天四海歸妙法は果して可能なりや 中四 中川義教君

一、歎ぶべき日本の非常時 中三 安松登志美君

一、故郷に歸る心 中三 岩崎龍雄君

一、愚人のたはごと 中四 高野教誓君

一、所感 高三 末吉元敬君

一、所感 高三 中里是要君

一、閉會の辭 葛原幹事

六月九日

第一學期各級選出雄辯大會を午後一時より本學講堂に於て開催、プログラム左の如し。

一、開會の辭 葛原幹事

一、非常時に際して 中一 駒井義照君

一、滿洲國を中心とせる日本 中二 田中靜光君

一、純正宗教の宣揚 中三 熊谷頴淳君

一、正義を求めて止まず

中四 秋山智教君

一、所感

中五 田中惠嚴君

一、傳統宗教の改造

高一 永瀧幾順君

一、高らかに歌へよ我等が校歌

高二 渡邊信覺君

一、因果について

高三 幡上昌男君

一、挨拶

辯論部長 松木本興先生

一、閉會の辭

高二 福田 幹 事

六月十五日、十六日、十七日

宗祖御入山大會につき道路布教を身延町佐野書店側に於て開催

十六日は雨中の爲め中止、獅子吼せる辯士は左の如し

十五日 小崎龍雄君 小野智好君 松井桓成君 福田勝義君

葛原榮靜君

十七日 當日は本山布教部聯合し、山門前に於て布教す。

大聖人一代記と閤院宮殿下 身延山御登山の映畫があつた爲め

聴衆約二百五十名といふ盛況であつた。當日の辯士左の如し

葛原幹事 福田庶務幹事 丸山書記 結城布教師松木辯論部

長依田布教部助手

『六月二十五日』 三光堂の祭禮に際し乞ひにより左の諸氏を派遣す。今井是觀君、倉橋智教君

八月四日 日朝堂の祭禮に就き左の諸氏を派遣す

青木孝勝君、松井桓成君

九月十八日 滿洲事變、三週年記念に身延町の男女青年、消防

在郷軍人、婦人會等主催の聯合記念講演會に、古川宣悅君、安

藤長次郎君を派遣す。

九月二十九日 池上學林雄辯大會に、中五加藤智學君を派遣す

十月五日 立正大學雄辯大會に高二松井桓成君を派遣す

十月十二日 宗祖鶴林會に際し通夜説教勤修す、説教者左の如

し

青木孝勝君、末吉元敬君、日置依法君、松原布教師、今村義

忠君、佐藤海善君、倉橋智教君、福田勝義君、野出學惠君、

松井桓成君、濱崎智研君、安藤長次郎君、葛原榮靜君、村上

清君、結城布教師

『十月四日』 仁王門祭禮に就き左の諸氏を派遣す。

青木孝勝君、松井桓成君、末吉元敬君

十一月二日

午後六時より身延公會堂に於て第九回本部主催の秋季聯合雄

辯大會を開催す。尼ヶ崎學林、光山學院、中山學林等の参加な

きは遺憾なれども、立正大學豫科、同専門部よりの参加を迎へ

意氣天を衝き加ふるに數名の飛入辯士あり、各々得意の雄辯を

振つて聴衆に多大の感動を與へ松木辯論部長の名挨拶あり、斯

くて十時近來稀なる盛會裡に本大會は幕を閉じた。而してプロ

グラムは左の如し。

プログラム

一、校 歌

一、開會の辭 幹 事 一 同

一、國王の恩恵を感じて 本 學 牧 教 存 君

一、國王の恩恵を感じて 本 學 牧 教 存 君

一、日蓮聖人現代への再現	本 學	田中靜光君
一、御東遷二千六百年を迎へ	本 學	安松龍寶君
一、健國の精神を語る	男子青年	望月文太郎君
一、延麓の生氣	本 學	齋藤威遼君
一、清算される者の姿を見て	女子青年	望月みさを嬢
一、所 感	男子青年	加藤市郎君
一、大和魂の鼓吹	本 學	小崎龍雄君
一、根本より目覺よ提唱せん	本 學	林 惠龍君
一、文化と自殺に就いて	池上學林	阿部貞猛君
一、如是我觀	女子青年	望月千恵子嬢
一、若人よ堅く鋏を握れ	立大専門部	川村正一君
一、農民を搾取するもの	男子青年	佐野三郎君
一、傳統的日本なれ	本 學	小野智好君
一、膨張か餓死か	立大豫科	荒川英春君
一、佛教批判に對する菩薩行	男子青年	池上 正君
一、オリンピック大會を追想して	本 學	中里是要君
一、去らんとして再び憶ふ	本 學	日置依法君
一、ローソクは燃える	辯論部長	松木本興先生
一、挨拶	幹 事	福田勝義君
一、閉會の辭	幹 事	古屋是聞

運動部

現在の吾が國狀は超非常時である、新聞、雜誌、パンフレットと有謂機關に依て報道されてゐる如く經濟に、思想に、人心

は絶へず戰々恐々としてゐる。我國は今や内外共に危機に直面してゐる、再び宗祖當時の國難を現出するのではなからうかと疑はずには居られない、殊に最近頻々と起る天變、地天、の凶兆は何を意味するか、天災は自然の理也と豪語する人もあらうが若し有りとせば其の者は認識不足なりとする、來るべき一九三五、六年の危機を思ひ合せ吾人は直に決意する所がなくてはならない、此處に於て必然起るべき問題は各自の壯健である譬へ天才聰明なりと雖病弱であるならば吾が日本帝國に生を得た價值があるか、更に非常時國難を双肩に負ふだけの資格があるか、小生は敢て言ふ此の超國難を打破し國家の柱石となるべき資格者は老若男女を問はず健全なる體軀と精神の所有者でなければならぬと斷言する。

近時吾が國が各種の運動に於て世界先進國をリードしある事は國際的にも社會的には將又國家隆盛の上から言つても眞に喜ぶべき現象である「健全なる精神は強壯なる身体に宿る」とエフエナルが言つた如く如何に高遠な理想、抱負を以ていても其に伴わない肉體を持つてゐては到底現實への道程に登る事は不可能である。

吾々青年宗教家が將來自覺せる宗教家として複雑な社會の表面に立ち、混沌として渦卷き流るゝ思想海に浮沈してゐる時代の人心を救済するには自分自ら其の渦中に拔手を切つて進んで行くと云ふ覺悟がなければならぬ其の覺悟である以上身体の強健と言ふ事は寸時も忘却してはならない、殊に靈峰祖山に學ぶ

本化の門下に唯本化別頭の大法を學ぶと言ふ事のみを以て足れりとせずあくまでも進取的に身体の鍛練に志さなければならぬのである、幸にして吾が祖山にも近時非常に運動熱が旺盛となり殊に此處一二ケ年に素晴らしい急速度を以て進展して來た事は喜ぶべきである、此の分では近き將來に於て必ずや吾々が待望する祖山運動黃金時代の現出するを見るであらう。

以下各部の狀況を示す

◆庭 球 部

先に永倉、野崎兩先生を送り更に今年の春山田兄を當部より去らせた事は實に残念だつたが幸ひにして松木、今村兩先生をはじめとし中里、末吉、小野、村上諸兄の當部を堅く保守してゐる事は欣びとする所である。

因に秋季庭球大會を十月中に開催する豫定であつたが祖山の非常時に邂逅した爲舉行不可能となりし事は合せて諸兄に深謝する。

◆劍 道 部

本部は現在五十余名の會員を有し五段小野先生を師範に戴き一心不亂猛練習に余念がない。今春青柳初段松野一級を當部より去らした事は一時部員をして落膽せしめたが新人小川、中谷出島、劍士の入部に依り當部は再び活氣付いた。現在の顔觸れは主將の中村、副將の佐野、中堅の松下、先鋒の古屋、小川、望月、安藤、中谷、出島、藤井、増田、齋藤等の諸劍士が祖山の劍道部を保守してゐる本年度の経過報告

五月六日南部警察署主催の峽南武道大會へ中村主將以下九名派遣。當日の結果は頗る好成績で個人優賞一等小川君、四等古屋君

五月二十七日午前八時より春期劍道大會開催。出場劍士約四十名、部長不在の爲望月徳英先生御臨席、成績は左の通り。

紅白戦Ⅱ一〇對七 紅軍の勝

リーグ戦ⅡA組一等中谷君 二等小川君 三等中村君

R組一等松井君 二等森 君 三等鈴木君

優勝戦一等中谷君 二等出島君 三等松下君

◆野 球 部

本部は今春の同窓大會に於て新に編入されたもので、日尙淺しと雖も其の進展振りは目醒しい。

昨年第一回峽南野球大會に於て好成績を示し、本年は目嚙の峽南大會に優賞を目指し部員一同終日猛練習、野球部の顔觸れは大体キャプテン今村君、ピッチャー長谷川君、キャッチ今井君、ショウト宮本君、セカンド村上君、外野畑野君等

九月十三日 母校對、富士身延鐵道の野球戦は身延中學校庭に於て開催され選手諸兄の努力に依つて遂に六對三の好成績を以て勝利を得た。

◆卓 球 部

本部は昨年同窓會運動部へ編入されたばかりで未完成な部である。然し最近ピンポン狂の續出と共に本部も次第に活氣付いて來た事は何より喜ばしい事である。

最近の賑振れは村上主將を始めとして小友、増田、中村、末吉諸兄等である。

尙去る十一月四日身延中學校に於て縣下卓球大會あり、當日本院より末吉元敬君外五名を派遣す。

◇ 競 技 部

まだはつきりときまらぬ中に、十月七日身延小學校々庭に於て祖山學院第三回運動大會開催と各新聞は一齊に報道した當の責任者である小生はあまりの早急にあはてふためいた否新聞記者をどなりつけたかつた、而し最早徒に激怒してのみよいものではないと悟つた小生は此の上は何處までも無理を押し通してもよいから許可を仰ぐべく東奔西走、當局に何回も當つて見た然しあせればあせる程期待は裏切られて行くのであつた、今は詮方なくあきらめるより他はないと無念の涙を飲んだ、然し一方同窓生の事を思ふときじつとして居られず、今は捨鉢的になり自分は犠牲になつてもと堅い決心を以て再三當局に當つた、一心は恐しいもので、そして運動會の前日やつと條件付で許可を得た、やれ嬉しやと思ふたのもつかの間諸兄も御存知の通りあのドシャ降り、其の時の氣持は天地を擁仰して只歎息を漏すのみと云ふ感がした、餘りと云へば餘りである、奮激の餘り一時は中止しやうかと思つたが同窓生の激勵により一週間日延べと決定して十四日に開催する事にした、遂に待ちに待つた當日が來た、氣付かはれた前夜の天候も朝から晴れ、秋晴れの空は飽くまで高く澄渡つてゐて、時々思出した様に眞白い斷雲が浮遊

してゐた、四方の山々はすっかり秋の粧をして雨上りの地面は麗かな朝の陽を受けて軟い地の香を放つてゐた、二百有余の祖山健兒は午前七時三門前に集合校旗を先頭に學友會旗應援旗を勇ましく振りかざす等幹事引卒の下に七時四十分小學校々庭に到着した直に國歌合唱、若月部長代理開會宣言に引續き各級主將宣誓と同時に運動會の火蓋は切られたのである、各級選手のユニホームにはそれぞれ變つたマークを輝かし選手連は吾れを忘れて飛んだり跳ねたり轉んだりして目新しい競技はプログラム通り次ぎ／＼に進行していつた、殊に各級の應援振りは觀客の目を異様に引付けた、午前中は觀客も余り日に止らなかつたが一時二時頃にはさしもの運動場も校舎も満員の有様だ、午後の競技は觀客の熱叫やら各級應援團のコーラスやらで非常に盛大になつて來た。大きな男が倒れたり走つたり、小學生のレース、幼稚兒童の競技等苦笑、爆笑が連續的に展開されてゐつた最後に待ちに待つた異裝百出の假裝行列には御膳の街返り觀客は滿面に微笑をたゝへながら拍手を送つた。

運動會が終る頃には短い秋の陽は稍西山にかたむきかけて遠くの山々から夕闇がのぞく頃かくして運動會も盛大裡に終了し、部長代理福島先生の發聲のもとに萬歲三唱して解散した。

おゝ樂しかつた秋の一日よ!!

當日の成績は左の通り

五十米	一等河村	二等香川	三等古川
百米	一等香川	二等河村	三等草ヶ谷

二百米	一等河村	二等古川	三等森
四百米	一等森	二等畑野	三等橋爪
障害物	一等松下	二等藤原	三等中尾
四百繼走	一等中五	二等高一	三等中四
八百繼走	一等中五	二等高一	三等中四
砲丸投	一等林	二等古川	三等松井
槍投	一等森	二等四條	三等村上
圓盤投	一等林	二等河村	三等森
走巾跳	一等深澤	二等畑野	三等香川
三段跳	一等畑野	二等深澤	三等村上
走高跳	一等松下	二等畑野	三等村上
八百米	一等林	二等齋藤	三等四辻
百足競走	一等中二	二等中一	三等高一
マラソン	一等秋山	二等鈴木	三等谷
學友會繼走	一等鷺峰	二等東北	三等北陸
假裝	一等加藤	二等川崎	三等赤池

(他)

對級競技成績

一等中五—三十二点、二等中四—二十九点、三等高一—十七点、四等高三—十五点、五等中二—九点、六等中三—十五点、七等中一—四点、八等高二—三点

最後に本運動會に際し小學校々長先生を甫め各先生に多大なる御盡力を蒙りし事は同窓生になり代り感謝致す次第であります
尙今村、丹羽、穗坂、武智、大橋、岩崎、田中、關口、杉山諸

兄には最後迄御骨折り下されました事を合せて感謝致します。
特に院長現下には運動部に對して深く御理解下され各大會に際し多大の獎勵金を御下賜下されし事を部員一同を代表して爰に厚く御禮申上げます。

昭和九年十月二十七日脱稿

古屋 生記

追記

去る十一月三日立正大學より劍道範士佐藤義遠氏外八名來山翌四日午前十時より身延中學校講堂に於て立正大學對峽南有段者の試合あり。當日の結果は次の如し

立正

峽南

大將 水野 引分

大將 中村

副將 西川 勝

副將 標

竹内 勝

佐勝

佐藤 勝

佐野

三木 勝

萩原

魚津

勝 小川

特に懐しく思つたのは來山の一行の中に嘗て祖山に學びし重松三木、古谷諸兄の顔が見へた事だ。試合の後歡迎座談會あり、本學院より福島、高木兩教授福田、古屋、葛原の諸幹事並に中村、佐野、松下、小川、藤井の諸兄出席す。

去る十一月十一日午前十時より母校々庭に於て部長代理松木先生臨席の元に秋季庭球大會開催、運惡く小松原法難會に倚遇し

た爲午前中は出場者少く場内は殺風景であつたが時刻が遷るに従ひ部員の姿が彼方此方から集り無事盛大裡に終了、尙當日の成績は左の如し

紅白戦は末吉紀本組の猛烈なる奮闘に依り遂に白軍大勝す。

優勝戦

一等(小)野組 二等(加藤)増田組 三等(葛原)高野組

抽籤試合

一等(小)野組 二等(末吉)紀本組 三等(松井)高尾組

クラス戦

一等(末吉)組 二等(小野)組 三等(古尾)組
高三(野)組 高二(松井)組 代理 二(高尾)組

◆旅行部

五月二日 福島、望月、加藤、教授引卒の元に七十余名の旅行團は好天に恵まれ、四泊五日間の期間にて無事佐渡旅行を終了す、

六月十八日 中一、中二、生徒の御嶽昇仙峽のハイキングを發表したが都合上中止となりし事は残念である。

◆佐渡旅行記

日程と順路の略記

〔六月二日〕 午前五時祖師堂前集合、身延驛發午前六時廿一分、東京驛着午後零時四十七分、自由行動―上野驛發午後十時三十五分(車中一宿)

〔六月三日、四日、五日〕在島―新潟驛着午前七時半―新潟港出帆午前十時十五分―佐渡夷港午後一時。

六日小木港出帆午前一時―直江津着午前五時―長野發午後一時―甲府發八時三十七分―身延着―十時山門唱題散會。

六月二日 綠林いよゝ深ふして幽致清涼涼味掬すべき季に吾が祖山健兒一行七十余名は、望月、福島、加藤、先生引卒の下に佐渡修學旅行の途に就いた。午前五時一同棲神閣前に集合法味を捧げて道中の無事を祈る。前日院長現下の懇篤なる訓話に次いで教頭先生の訓示あり殘留生に見送られて身延驛に向ふ。六時廿一分愈々車中の人となつた一行は、窓外に展開されてゆく自然の美、殊に朝靄にかゝりし雲表に聳ゆる富士の雄大さと、激流岩を嘯む富士川との天然の風景を稱し、富士驛で乗り換へ一路東都に向ふ。午後一時東京着。ホームには校友最上、田島、梅溪、古谷、辛島、竹中の諸兄が出迎へてくれる。九時半まで自由行動、午後十時半上野驛發、新潟行の列車を待てば、學院前講師望月堯匡先生が懇々御見送り下された。一行は先生と校友諸兄の御厚志を謝しつゝ、暗の旅路にのぼる。

六月三日 轟々たる列車の音響に淡い夢を覺ませば早や新潟驛。七時半、赤い眼をこすり乍ら信濃川の朝風を沿ひつゝ、新潟港棧橋に急ぐ。少し間があるので思ひ／＼に市内散歩、朝食などを済まして九時半汽船乗場へ向ふ十時半出帆、雨は霏々と降り初める颯んだ波は幸ひに荒れなかつた。船が進むにつれて墨繪のように浮き出た島が次第に縁を増して眼界に溶けこんで来る

これが聖人流謫の孤島として日頃吾等の思を繋ぎ來たつた憧れの靈地：佐渡島なのだ、ジツト見つめて居ると感激の涙がホロリとこぼれた。棧橋には當地妙法寺信田師が信徒諸氏と共に御出迎ひあり。吾等は此の雨中の御出迎ひを感謝しつゝ、憧れの佐渡へ第一步を印した時は午後一時、金丸旅館に案内され、此處で晝食、信田師及び旅館主人の意見に従ひ雨中旅行の困難を思ひ、且つ自動車の都合上止むなく豫定の一部を變更した、二時幸ひ雨も晴れて來たので直に妙法寺に至る、山主信田師及び信徒の歡迎を受け寺寶拜觀、女人講中の題目踊りに佐渡旅行の第一印象は尊く、うれしかつた。これに對して福島先生の謝辭あり、小崎君の「身延山に於ける日蓮聖人の生活」といふ題で約十分間講演

妙法寺の御厚情を謝しつゝ、車中の人となる、バスは泥濘の道を塚原根本寺へと急ぐ、青田の中に見ゆる參差たる杉林：古色溢れ幽遠境。文永八年十一月より翌年四月七日まで宗祖が起居し給ふた塚原三昧堂の靈蹟だ。白い石垣で圍まれた、一間四面の戒壇塚を雨に濡れ、涙にむせび乍ら讀經、吾等の聲は感激にふるへる。

塚原と申す山野の中に洛陽の蓮臺野の様に死人を捨つる所：靈地に立て聖人の御遺文を想ひ出す時、六百五十年前の有様が犇々と胸を衝く、宗祖は此の三昧堂の雪の座に彼の本地開顯の開目鈔を御選出なされたのだ。二天門を潜つて左に經藏本堂、右に庫裡、其の中央に祖師堂が巍然として聳え一段と神々しき

を添へてゐる。豫定のコースを變更し寶物拜觀の出來なかつたのは遺憾の事乍ら山主自ら御開帳を辱ふしたことは恐縮のいたりであつた。而してこの感慨深き靈地にいつまでも滞在したいとさへ考へ乍ら御山主の御見送りを辱うし、拜謝辭去した。雨は降りしきる塚原から西北一里半の中興の御井戸を訪ふ、此處にて宗祖中興入道の招きに應じ信者の爲めに此の井水を用ひ受茶羅を書き與へられしといふ。堂後には中興入道の墓がある。此處を去つて黒木御所を參拜す。此處は順德帝配所の遺蹟、承久の變に逆臣、北條義時の爲めに此の佐渡ヶ島へ遷幸あり上皇の畏れ多くも還幸の一縷の御望みに二十余年寂しい配所の月を眺め給ひし、行在所の御舊蹟

啼けば聽く聽けば都の戀しさに

此の里過ぎよ山ほよゝぎすー嗚呼

佐渡の地を踏み史實に接して上皇の此の御詠を口ずさみ、誰か承久の哀史に泣かざる。

打ち開く田圃の細道を行くこと數町、御松山實相寺に至る。宗祖御袈裟掛で名高い寺である。

實相寺から裏山の路を廻つて一ノ谷妙照寺に急ぐ。土砂降りの雨に打たれつゝ痛い足を引きずり妙照寺着は七時御寶前に禮拜讀經の後、燭火佐渡始顯の大曼茶羅を拜し凡てを忘れて端座合掌、塚原の聖人は上行再誕としての入開顯であり、一ノ谷の聖人は本門本尊の顯發であつた。吾等は此の道場を踏んだ時嚴肅なものが覆ひかぶされて來た。吾に歸れば「車が迎ひに來た

ぞ」と夕闇の森の彼方から誰かの聲、車窓に映ゆる眞紅の夕焼を浴びて氣も明くなつた。久保田旅館に旅装を解き、入浴に寛いで薄闇の街から流れて来るオケサのリズムを耳にしつゝ、夕食を済まし、佐渡第一夜の夢を結ぶ。

六月四日 昨日の雨空に比して今日は素晴らしい天氣だ。明朝の春天に新しき感覺を擅まゝに相川鑛山へ向ふ。相川鑛山は今は、三菱の經營に移り、現在は鑛區三十萬坪、坑道の深さ二千尺、年額八十萬圓の金を産す、左に大熔鑛爐を眺め、汗を拭ひつゝ鑛山道を登ること十余町にして坑道に至る。絶えず昇降するエレベータは何百貫といふ黄鐵を搬出してゐる。二千尺の地下で黙々と働く彼等に何か教へられるようだ。ガイドマンの聲も聞えぬ騒音の中を次々へと見學だ、熟練した選鑛婦の感覺の鋭さ……耳を聳破く破碎機の響き……座せば三尺の地をも掩え得ぬ人間の偉大な力に驚歎しつゝ山を下る。

久保田旅館で、晝食を済まして新町へ向ふ。新町では、若林松井旅館に分宿、輕装して直に眞野御陵へ詣でる。

御陵は順德帝の大葬塚とも稱せられ、方五十間の石垣を周らし、城内には墳墓深く鎖し、老松雲に掩はれて幽閑崇嚴、自ら襟を正さしめる。御陵の松が奏づる哀調の曲を聞き乍ら一同讀經。上皇の御製

思ひきや雲のはてまで流れきて

眞野の入江に朽ちはてんとは。

を想ふて、しばし哀調の涙にむせぶ。記念帳にスタンプを押し

墓守長を見返り乍ら山陵を下る。

國分寺前にて自動車は止まる。當寺は順德帝佐渡御遷幸最初の假宮であつた名利、案内を乞はず。阿佛坊で有名な妙宣寺に詣でる。門をくぐれば佐渡一の五重塔老杉の間に聳えて居た。門側に苦むす五輪の石塔は南朝の忠臣日野資朝公の墓。身は朽ちて六百有余年而し忠臣の芳名は朽ちない。合掌冥黙し終つて祖師堂に詣でる。御寶前に法味を獻じ、執事の説明にて御靈寶拜觀、當寺の靈寶は中山に次ぐと。かく多數の靈寶も畢竟阿佛坊夫妻の法勳を物語るもの、我等は當寺の心盡に感謝しつゝ辭去附近には阿新丸の隠れ松がある。世尊寺は興門派に屬する古刹去つて日朗坂へと自動車は疾走する。現在の坂は二十度角にすぎないが、然し今の坂に立つても遠い昔を回顧すれば、日朗上人の困苦が偲ばれる。坂の上にある日朗山、本光山は其の舊蹟坂の中央に建てる赦免石は涙の往昔をたどらせる。坂の麓より南二町順德帝第一皇女慶子女王の御墓所がある。薄倖なりし女王の尊靈を弔ふ、難題野は時間の都合上中止。午後五時新町の旅宿に着いた。

六月五日片雲も止めず、出發には時間があるので、宿より近い浪途地藏へ歩を運ぶ。大小幾百の地藏様が雜然と祀られてゐる。紅葉が即興の句「野呂松がのろりと出たり夏の月」

十時、乗車、問野灣は右に展けて風光絶佳。車は松林を縫ふて馳る白帆点々と紺碧の水平線に浮んでゐる。十二時、小木着、喜八屋旅館に少憩安隆寺に歩を運べば街並には弔旗が垂れてゐた。

祖師堂に法味を捧げ遠く東郷元帥の英靈に回向する、當寺は昔宗祖救免の使者日朗上人が着島の砌り御座船難破して、經ヶ島に難を凌がれし時、禪僧學法坊は御救助して彼れが堂へ迎へ後改宗して日賢と稱し、後年其の堂を今の寺域に移轉せるなりと

山主倉田師の御厚遇に甘へて晝食を濟まし、記念撮影、經ヶ島へ向ふ、海音寺境内の御所櫻は順德天皇御手植櫻で先年天然記念物に指定されたといふ。島上に朗師、旅姿の石像及び袈裟掛松がある。歸りは小舟で小木港へ着く。小木の公園城山は港を俯瞰し、遠く日本アルプスの連峰を望み、眺望すこぶる莊大。

夕食後今宵を最後の鳥の情緒に心ゆくまでにひたる。ともあれほとゝぎす鳴く音いたましき順德帝の御遺蹟、さては聖人困苦の地、さぐれば盡きぬ史の國は明麗無比の風光にとけて痛く吾人の心に泌みる、切れぬ情緒も纔と共に、衣々之をおくる明滅の燈火、愛しの佐渡は泣きぬれて木精もしない船の音、夜半一時佐渡丸に乗船、もたれる欄干も冷たかつた。

肌をさす鹽風に吹かれて上陸すれば學院先輩、延壽寺安田師の御出迎あり。導かれて延壽寺に至る。洗面して御寶前に海上の無事を奉謝し、心からなる茶菓の接待を受けて少憩、辭して直江津驛に至り六時三十五分列車に投ず。長野驛で下車善光寺見物、豫定より少し遅れて甲府着午後七時半、夕食を濟まし、八時三十七分身延行の電車に收まつたら、迷子になった紀本君が無事に歸つて來た。ホームには鹽田先生等の御見送りを辱ふし。つゝがなく一行身延山門に着いた時は午後十一時であつた。一

同見學旅行の無事を宗祖に奉告し萬歳三唱して解散。最後に謹んで今回修學旅行中歡待を辱ふせる各寺院及び信徒に對し厚く謝意を表して欄筆する。

(葛原記)

◆文學部

櫻 榮 記

〔文學部幹事は此の棲神を作ることが殆んどの使命なんです。それで仕事の進行狀態を記するのがほんとうか知れませんがそれよりも、棲神そのものが文學部の記事と想ひ、略します。〕

〔今年の五月より圖書縦覽室が整備されました、現在會員の御利用を願うと同時に助手一名をも欲しいと思ふ。〕

〔棲神は本山のものでもなく、學校のものでもなく學生のものです、だから、壓迫や脅迫や自宣傳傳は眞平です。〕

〔棲神は三文雜誌や同人發行のものではない、貧弱なれど祖山の學報と任じて居るのです。〕

自分の文字を印刷したために苦しい學生の仕事をいぢめないで下さい。

〔身延のことだつたら立派な「教報」があります、童話やお話は何卒他の機關へ、オヨソ棲神としてドウカと思ひイミナイものは載せない——今後への希望です。〕

〔學生の仕事や尊い犠牲を玩具にされてたまるものか殆どが苦しい學生のふところに出來上つて居る同窓會には、殘念乍ら、何でも活字にするありあまつた力がありません。〕

□方針も、内容も、選擇も印刷所迄變更した、獨斷であり僭越
 かも知れないが、少しでも良くしたい爲でした。

□私一人で、にくまれの先陣を承ります、來年から意志を繼が
 せたい、より一歩づゝ向上するものゝ先駒であつたら、それ
 に代へる喜びはない。

□文學部の事に關しては幹事に絶對權を持たせて下さい、でな
 いと仕事が出来ない。

□文學部は仕事は膨脹しても決して資本は之に平行しない、で
 同窓會費三ヶ年完納にして卒業後四年以内の者及特志ある者
 に限り棲神を贈呈する―ことにしたい。明文にしくとも、
 それ以上出来ない、

□紙數の都合上やむなく没とした原稿は名を列したのみで許し
 て頂く、

詩

川 柳

黎明以前の佛教徒

行 學

佐渡旅行と題して

日蓮主義の國体論

雜 言

否妻帶論

□どれも皆傑作でありましたが現在でさへ紙數が一杯なんです
 どうにもなりませんでした

古賀嘉照氏

田川惠良氏

津田觀貞氏

佐野英生君

久住龍騰君

齋藤威遠君

宇佐美鍊昌君

仁田原英王君

□何にも知らない私に、之だけの仕事を爲し遂げさせて呉れた
 人に、小野、松井、五水井、田邊兄がある、友達の有難さを
 初めて深く知つた次第です。

◎同窓會文學部へ寄贈書籍

叡山學報

龍谷學報

鶴 林

求 道

つはもの及戰友

立正大學新聞

雜誌十二種

新聞十三種

叡山專修院殿

龍谷學會殿

池上學林殿

求 道 閣殿

東京遠藤豊三郎殿

荒川英春殿

身延教報社殿

◆奇附者芳名

金 一 封

金 五 圓 也

金 拾 五 圓 也

院長 狹 下

中村執事長殿

本山役課御一同殿

□鹽田先生、松木先生、望月寛榮師、度々御迷惑をかけて済み
 ませんでした。厚く御禮申し上げます、

□そして出來上つたのです、此の棲神が

— 完 —

◆厚徳寮報

保 坂 記

朝は六時の起床報知木に目を覺ますのが常である。是れは四季に亘つて變りが無い。寮生の本山への朝勤奉仕は毎朝十余名宛七組に別れて是れを實行してゐるがその日の朝勤當直以外の者は全部寮の禮拜堂に於て朝勤をする事になつてゐる。食事の時間なども朝は七時、晝は十二時、夕は五時といふ事にきまつてゐて、其の日、其の日の當直に當つた者が御互に氣を付け合つて、殆ど此の時間は勵行されてゐる、土曜、日曜、祭日を除いた以外の日には午後八時になると報知木が鳴り、舍生全部が廊下に並んで、出缺点呼が行はれ舍監に夜の挨拶をする。舍生八十余名は毎日こうして、聖訓を遵奉しひたすら行學の二道に精進する事に不斷の努力を捧げてゐる。一週間に二回乃至三回の御馳走日がある、此の日は舍生にとつて、どんなに楽しい慰安の日であるかは舍外に寝起きする人達には想像する事の出来ない、又味ふ事の出來得ない事だらうと思ふ。

又到着した郵便物は寮長さんが各自の處へ届けられるやうになつてゐるが、自分の處へ手紙が來た時などは特に配達してくれた寮長さんに對して感謝の念が起る。今年の春、灘上舍監が大正大學へ御遊學の爲止むなく舍を退かれる事になり、新に舍監として我等の先輩、學院辯論部長、本山布教師として最も信頼崇敬する松木本興先生が就任せられた、先生は常に玉の如き溫情を以て寮生の御指導に當られて居らるゝ。前副舍監多田先

生がつい此の間御都合で舍監を辭職なされた事は寮の隆盛を前にして實に遺憾であるつた、而し多田先生の後を次いで副舍監として海外より新歸朝の高木行俊先生が就任せられ、愈々寄宿舍發展に献身的御盡力下さることゝ舍生一同は兩舍監の下に協力一致、祖山教學の興隆に努力してゐる。前役員の後を引き受けて現在寮の役員となつて活躍して居る方々の名を記せば寮長中村正俊氏、副寮長二名、今村義忠氏、幡上昌男氏、是れに當り、前會計久住龍騰氏は病身の爲辭任し、現在は舍生の信頼深りし淺野詮男氏が會計總務に選ばれ、古川宣悅氏が助手として執務されてゐる。又舍主の健康を目的として運動部では、野球部を始めとし、劍道部、卓球部、柔道部、陸上競技等の設備を設け舍生の親睦と質實剛健の氣風を養成する事に力めてゐる。

運動部の主事は古屋是聞氏、文學部並に演藝部の主事は淺野詮男氏で、毎月一回週覽誌を發行したり、毎學期一回の慰安會を開催して舍生に慰安を與へてゐる。以上は舍に附屬せる役員及び部であるが、其の他個人としての會は澤山ある、今村義忠氏主事の布教研究會(週一回)安藤海長氏發企の雄辯研究會淺野詮男氏常任主事の童話研究會(週一回)で此れは寄宿舍附近の兒童並に會員集合の上開催し、本遠寺、本國寺等に會員を毎週二回派遣し向上を計つてゐる。以上の會は我々宗教家にとつて將來少からず得る所があるだらうと思ふ、その他岩崎主事の書道研究會(支部ありて毎學期展覽會を行ふ)丹羽好文氏主事の洋畫研究會久住龍騰氏主事の日本畫研究會等は何れも年に一回展

同窓會記

覽會を行ひ、帝展以上の盛會を見る。如斯く我等の寄宿舎厚德寮も日進月歩隆盛に向ひつゝある。此の寄宿舎へ来る前の自分の生活は型に入つたやうな嚴格そのものゝ生活であつた。それに引き換へて何んのわだかまりもない、朗かで愉快な學生ゝ活、しかも八十余名と云ふ大きな団体としての生活なのだ、憂鬱だつた自分の性質が何時の間にか朗かに變つて來た事を深く感じさせられる。

——をはり——

